SYNTHESIS 2022

シンセシス

The Annual Report of the MGU Institute for Liberal Arts

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報 2022

INDEX

01 研究所概要 …… 01

02 月例研究報告 …… 07

03 ランゲージラウンジ活動報告 …… 27

04 語学検定講座報告 …… 33

05 研究プロジェクト …… 41

06 研究業績 …… 45

01

研究所概要

01

2022年度教養教育センター付属研究所概要

Ⅰ．組織

◆研究所運営委員会執行部

所長：福山勝也
主任：長谷部美佳　Elam Jesse
研究部門運営委員：森田恭光　高桑光徳

◆研究所所員

李善姫　池田昭光　石井友子　猪瀬浩平　植木献　上野寛子　塩谷祐人　大森洋子　亀ヶ谷純一　金珍娥　黒川貞生　小泉ユサ　篠崎美生子　嶋田彩司　杉崎範英　鈴木陽子　徐正敏　高木久夫　高桑光徳　田中祐介　張宏波　鄭栄桓　土屋陽祐　徳間晴美　中野綾子　永野茂洋　名須川学　西香織　野副朋子　長谷部美佳　日高知恵実　福山勝也　三角明子　森田恭光　山内薫　吉岡拓　渡辺祐子　Constantinescu Cezar　Elam Jesse　MacLellan Dawn　Thomas Dax　吉田真　洪潔清　中谷深友紀　伊藤瑳良　井ノ口尊道

◆研究員

安部淳　池上康夫　石渡周二　可部州彦　黒田正明　鈴木義久　武光誠　原田勝広　松山健作

Ⅱ．研究活動

1．研究プロジェクト（*＝代表者）

①食の選択と栄養学研究（1年目）
　*植木献、野副朋子、塩谷祐人
②中東・北アフリカ諸国の高等教育に関する研究動向の調査
　*池田昭光
③学部留学生に対する就職活動支援に関わる教育方法論の構築
　*山内薫

2. 研究報告会

	日付	報告者（敬称略）	テーマ
第１回	６月８日	李善姫	使用頻度から考察する動詞の語彙的な意味 ―韓国語の移動動詞を中心に―
第２回	７月６日	石井友子	日本人学習者にとって適切な「一語」とは
第３回	10月12日	日高知恵実	中国語方言グッズの世界
第４回	11月９日	Constantinescu Cezar	１年生からの自己決定型学習を奨励する： ドイツ語の授業における電子ポートフォリオの活用について
第５回	12月14日	杉崎範英	走りのスポーツ科学研究
第６回	１月11日	福山勝也	小角X線散乱測定による炭素材料中の細孔構造評価
第７回	２月９日	高桑光徳	言語教育のジレンマ

Ⅲ．教育活動

《学内語学試験》

※昨年度に続き、コロナ禍により通常試験受験に制限があり、要望が多かったためオンライン受験の機会を提供

TOEIC IP試験			
	開催方法	日付	受験者数
第１回	オンライン	6／28（火）～7／6（水） ※この間に１度のみ受験可	90名
第２回	オンライン	10／13（木）～10／21（金） ※この間に１度のみ受験可	73名
第３回	オンライン	12／2（金）～12／12（月） ※この間に１度のみ受験可	74名
第４回	オンライン	1／27（金）～2／8（水） ※この間に１度のみ受験可	43名
TOEFL ITP試験			
	校地	日程	受験者数
第１回	横浜	6／15（水）15：15～18：15	64名
第２回	横浜	10／5（水）15：15～18：15	54名

《講座》

◆短期講座・通年講座◆

	スペイン語DELE・SIELE 試験準備講座				ドイツ語技能検定試験対策講座		TOPIK韓国語能力試験対策講座						中国語資格試験対策講座	
					3級	4級	TOPIK I -1級		TOPIK I -2級		TOPIK II		HSK4級	
学期	春学期	秋学期	夏季集中	春季集中	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期
実施期間	5/11～6/29	10/5～12/7	9/5～9/9	3/6～3/10	4/28～6/23	10/5～11/30	5/10～6/28	9/27～11/29 ※10/18休講	5/9～6/23	9/26～11/28	5/13～7/1	9/30～11/25	5/6～6/24	10/7～12/2
校舎 教室 ★はオンデマンド併用開講	オンライン Zoom	オンライン Zoom	オンライン Zoom	オンライン Zoom	オンライン Zoom ★	横浜校舎 4号館 433教室 ★	オンライン Zoom	横浜校舎 1号館 136教室 ／Zoom [ハイブリッド]	オンライン Zoom	横浜校舎 5号館 545教室 ／Zoom [ハイブリッド]	オンライン Zoom	横浜校舎 5号館 512教室 ／Zoom [ハイブリッド]	オンライン Zoom ★	オンライン Zoom ★
曜日時限	水曜 4限	水曜 4限	文法編 10:00～13:00 会話・リスニング編 14:00～17:00		木曜 5限	水曜 5限	火曜 4限	火曜 4限	月曜 4限	月曜 4限	金曜 4限	金曜 4限	金曜 4限	金曜 4限
回数	各全8回		各10コマ（2コマ×5日）		各全8回		各全8回							
講師（敬称略）	Luis Rabasco		文法編 仲道 慎治 会話・リスニング編 Eugenio del Prado		佐藤 修司		金 南听（キム・ナムン）	柳 慧政（ユ・ヘジョン）**	秋 賢淑（チュ・ヒョンスク）		高槿旭（コ・グヌク）		鈴木 健太郎	
募集人数	各20名程度		各20名程度		各10名程度		各20名程度							
エントリ者数	春：4名 秋：8名		文法編 3名 会話・リスニング編 4名	文法編 7名 会話・リスニング編 6名	春：8名	秋：4名	春：9名 秋：7名		春：7名 秋：6名		春：13名 秋：10名		春：6名 秋：6名	
2021年度毎月出席者数*（名）	5月 3・3・3 6月 3・3・1・2・1		文法編 3・2・1・2・2 会話・リスニング編 2・2・1・2・2		4月 3(7) 5月 4(6)・3(6)・3(6) 6月 4(4)・2(1)・3(1)・3(5)		5月 7・4・4・3 6月 3・2・1・1		5月 6・5・4・5 6月 4・3・2・3		5月 11・7・3 6月 2・4・3・2 7月 3		5月 3・4・3(4)・4 6月 4・4・3・3	
	10月 4・5・5・5 11月 3・2・3 12月 1		文法編 6・6・5・4・4 会話・リスニング編 5・5・3・3・3		10月 1・1・0・1 11月 1・1・1・1		9月 3 10月 5・5・2 11月 1・3・2・2 **秋学期1回目(9/27)のみ金南听先生が担当		9月 5 10月 5・2・2 11月 1・2・0・2		9月 4 10月 3・3・2・2 11月 2・2・1		10月 4・4・3・3 11月 1・2・2 12月 1	

*manabaコンテンツ閲覧数、小テストの学習状況、オンデマンド教材閲覧数等を含む

中国語資格試験対策講座				実用フランス語技能検定試験対策講座				日本語能力試験（JLPT）対策講座		日本語教育入門講座		手話特別講座	キャンプインストラクター資格講座
HSK3級		中検4級		仏検3級		仏検4級	仏検4・5級	JLPT N1					
春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春季集中	秋学期
5/6～6/24	10/7～12/2	5/12～6/30	10/7～12/2	5/10～6/21	10/5～11/23	5/16～6/20	10/3～11/21	5/10～6/28	10/4～11/29	5/12～6/30	10/5～11/30	2/21～22、24、27	12/21
オンライン Zoom ★	オンライン Zoom ★	オンライン Zoom ★	オンライン Zoom ★	オンライン Zoom	オンライン Zoom	オンライン Zoom	横浜校舎10号館1051教室	オンライン Zoom	オンライン Zoom	オンライン Zoom	オンライン Zoom	白金校舎3号館3023教室 本館1253教室	横浜校舎体育館
金曜2限	金曜2限	火曜2限	金曜3限	火曜5限	水曜5限	月曜5限	月曜5限	火曜4限	火曜4限	木曜5限	水曜5限	3・4限	4限
各全8回				各全7回		各全6回		各全8回		各全8回		全10回	全1回
鈴木 健太郎		李 麗君	楊 川力	檜垣 嗣子		加藤 美季子		野口 直子		梶川 明子		荒木 泉（ゲスト講師）長田 静乃	塚脇 誠
各10名程度				各20名程度				各20名程度		各20名程度		30名程度	
春：7名 秋：4名		春：11名	秋：5名	春：9名 秋：10名		春：7名 秋：5名		春：4名 秋：5名		春：14名 秋：10名		37名	2名
5月 3・4・4・2(3) 6月 4・2(4)・3・2		5月 4(7)・4(5)・3(6) 6月 2(3)・2(5)・1(6)・1(6)・1(7)		5月 6・3・5・5 6月 5・3・3		5月 5・1・1 6月 0・0・1		5月 2・2・2・2 6月 2・2・1・2		5月 10・7・6 6月 6・8・6・6・6			
10月 1・1・2・2 11月 2・2・0 12月 1		10月 4・1・4・3 11月 2・1・1 12月 1		10月 9・7・4・6 11月 5・4・4		10月 4・3・3 11月 2・3・1		10月 0・3・3・2 11月 1・1・1・1		10月 7・8・6・5 11月 4・4・4・4		22・21・18・18・21	0

◆TOEIC講座◆

講座名	開催方法	日程	講師（敬称略）	申込数	受講者数
〈夏季集中特訓講座〉基礎コース	オンライン（Zoom）	8／22～8／26（5日間）9：15～12：30	中村道生	16名	11～14名
〈夏季集中特訓講座〉実践コース	オンライン（Zoom）	8／29～9／2（5日間）9：15～12：30	中村道生	15名	12～13名
〈春季集中特訓講座〉基礎コース	オンライン（Zoom）	2／13～2／17（5日間）9：15～12：30	中村道生	11名	9名
〈春季集中特訓講座〉実践コース	オンライン（Zoom）	2／27～3／3（5日間）9：15～12：30	中村道生	14名	9名

Ⅳ．その他

《公開講演会》

・新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から、今年度は公開講演会の開催を自粛した。

《刊行物》

・明治学院大学　教養教育センター付属研究所年報『SYNTHESIS 2022』3月発行

02

月例研究報告

02

月例研究報告

「ことば」の学びに寄り添う日本語教育
―「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざして―

山内　薫

拙著『「ことば」の学びに寄り添う日本語教育―「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざして―』（くろしお出版、2022年2月）の出版に伴い、教養教育センター付属研究所2021年度第2回研究報告会（2022年3月23日）で報告の機会を頂いた。本報告会では、対面とオンラインを併用し、まず前半30分に本書の構成に沿い、研究を報告した上で、後半30分に質疑応答を行った。

本書では、社会的文脈や単一的な目的設定を背景とする、将来において「使うあてのない外国語学習」（＝将来の就業あるいは学業において使用する可能性が低い「ことば」を学ぶこと）への取り組みが注目される。このような学びの取り組みは、本書の研究協力者であるフランスの日本語専攻学生だけではなく、国外の日本語学習者、そして、国内の大学で外国語を学ぶ学部生にも共通する。本書で注目する「使うあてのない外国語学習」というキーワードは、英語以外の言語を外国語として学ぶ意義に関する議論において、「使うあて」があることが前提とされていることに対する問題提起となっている。本書は次の8章で構成される。

第１章　「日本語学習と人生のつながり」という問題設定
第２章　「学習と人生のつながり」はどのように捉えられてきたか
第３章　日本語専攻学生が置かれている日本語学習環境
第４章　人生と日本語授業―日本語ポートフォリオ実践研究―
第５章　生活と日本語学習―在籍生へのインタビュー調査―
第６章　「移動」と日本語学習―修了生・中退及び転科者への質問紙・インタビュー調査―
第７章　総合考察：「学習と人生のつながり」から捉える日本語学習の実態
第８章　「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざした外国語教育に向けて

フランスの国立大学の日本学科では、これまで、幾度も日本語専攻学生に対する教育が再考されてきた。しかし、「ことば」の教育を再考する上で、日本語を学ぶ当事者である日本語専攻学生の視点が組み込まれていなかった。また、「日本語専攻学生の日本語学習」は、日本語専攻学生が「成功者」（＝進級・修了した学生）となることと意味づけられていた。そして、将来において「使うあてのない外国語学習」としての日本語を主専攻として学ぶ学生に対し、言語的道具としての「ことば」の獲得に価値が置かれる日本語学習が行われてきた。しかし、「成功者」を増やすことを目的とする従来の大学・教師の視点からではなく、日本語を学ぶ当事者である日本語専攻学生の日本語学習実態から、教育のあり方を探究する必要がある。

このような問題意識を背景とし、本報告では、まず、本書における研究において、「ことば」を学ぶことにおける基本的な視点として、「生きる活動」及び「移動性」という二つの視点を持つこと、そして、フランスの国立大学の学士課程日本学科における日本語専攻学生（在籍生、修了生・

中退及び転科者）の日本語学習経験と人生のつながりを追究したことを確認した。さらに、生涯教育論、及び「移動とことば」研究のバイフォーカル（bifocal）なアプローチの概念を枠組みとし、質的研究法を用い実施した三つの調査研究を示した。

続いて、分析の結果として、日本語専攻学生の日本語学習経験は、「学習と人生のつながりの軸」の一要素として、学生の人生とつながっていること、また、生涯における学習を連繋する基点を構築すると同時に、垂直的視点（時間）・水平的視点（空間）の「移動」との相互依存的関係性（共振、原動力、一体）をもつことが明らかになったことを確認した。そして、考察の結果として、外国語の教育実践者が「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化という視点をもって教育実践を行うことで、海外の日本語教育及び日本の大学の第二外国語教育が、グローバル時代の人生を歩む外国語学習者の移動性を踏まえた「生涯にわたる言語学習」を支援する教育へと変わる可能性を示した。また、上述したような日本語教育を含む外国語教育が質的に転換する必要性と可能性を示した上で、外国語教育や教養教育に携わる先生方と、「ことば」の学びに寄り添うことについて議論をさせていただいた。

本研究は科研費（21HP5053）の助成を受けたものである。

月例研究報告

使用頻度から考察する動詞の語彙的な意味
—韓国語の移動動詞を中心に—

李善姫（イ・ソニ）

動詞はその語彙的な意味から様々な名詞句と結びつくことができる。しかし、ある名詞句とある動詞との結びつきが必須なのか、まれなのか、あるいは結びつきが不可能なのかは、使用頻度を調べないと、簡単にわかるものではない。たとえば、

(1) 서울에서　부산으로　갔다.
　ソウルから　プサンへ　行った。
(2) 서울에서　부산으로　떠났다.
　ソウルから　プサンへ　発った。

「가다（行く）」「떠나다（発つ/去る/離れる）」は、(1)(2)のように「서울에서」という出発点をあらわす場所名詞句、「부산으로」という到着点をあらわす場所名詞句と結びつくことができ、「가다」「떠나다」は、出発の位置変化や到着の位置変化をあらわす動詞であることがわかる。

ところが、実際の言語使用においては、それぞれの動詞は出発点や到着点をあらわす名詞句との結合頻度が同じく現れるわけではなく、偏りがみられる。「가다」は到着点をあらわす名詞句との結合頻度が高く、「떠나다」は出発点をあらわす名詞句との結合頻度が高い。「가다」「떠나다」だけではなく他の移動動詞も、実際の言語資料において出発点、到着点などの場所名詞句との結びつきに偏りがみられるのである。

そこで、李善姫(2021)で‘移動主体の位置変化をあらわす’という語彙的な意味をもつ移動動詞「가다（行く）、오다（来る）、떠나다（発つ/去る/離れる）、헤매다（さまよう）、걷다（歩く）、건너다（渡る）、모이다（集まる）、향하다（向かう）」を対象に実際の言語資料における場所名詞句との結合頻度を調べ、考察を行い、それぞれの動詞の語彙的な意味の側面から次のように分類することができた。

1）出発型
　出発到着志向型：떠나다（発つ/去る/離れる）
2）経過型
　① 経路型
　　経路無方向型：헤매다（さまよう）
　　経路方向様態型：걷다（歩く）
　② 経由型：건너다（渡る）
3）到着型
　純粋到着型：모이다（集まる）
　到着志向型：향하다（向かう）
　到着経過型[1]：가다（行く）, 오다（来る）

分類をみると、同じ語彙的な意味をもっているが、実際の場所名詞句との結合頻度から調査をすると、場所名詞句との結合において異なる様子をみせ、それぞれの動詞が異なる語彙的な意味の側面をもっていることが分かる。

現在、従属節の述語が「移動動詞の-어서」で表される複文において，従属節の表わす出来事と主節の表わす出来事との意味的な関係について考察を行っているが、その意味的な関係において、使用頻度から考察した李善姫（2021）の動詞の語彙的な意味が関係することが分かった。たとえば、次のような文である。

（3）걸어서 학교에 갔다.
　　歩いて学校に行った。
（4）집에 가서 공부했다.
　　家に帰って勉強した。

移動動詞の「-어서」で表される出来事が主節の出来事に対して、「出発完了」「場所提示」「空間的経過」「方向」「移動様態」「状態」のような様々な意味的関係で結びついており、その意味的関係は複文全体の構造に支えられ，その構造が、結合頻度から考察した移動動詞の語彙的な意味が反映されるものであることを確認した。

今後は、実際の言語資料における結合頻度から考察した移動動詞の語彙的な意味が、アスペクト、複合動詞の語構成にどのように現れるのかを考察し、語彙的な意味と文法現象との関係を示すのが課題である。

【註】

(1) 李善姫(2021)では、「가다（行く），오다（来る）」を「到着経過出発型」と分類したが、データを増やし、さらに考察を行った結果、「到着経過型」に分類するのが妥当であることが分かった。詳しくは李善姫（2023）を参照されたい。

【参考文献】

李善姫（2021）「場所名詞句との結合頻度に現れる韓国語の移動動詞の語彙的な意味の特徴」明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュール』第15巻

李善姫（2023）「従属節の動詞が韓国語の移動動詞の場合の従属節と主節の意味的な関係―従属節の動詞が어서で現れる文を中心に―」明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュール』第17巻（2023年3月掲載予定）

月例研究報告

日本人英語学習者にとって適切な「一語」とは何か

石井　友子

第二言語習得研究において語彙習得に関心が集まって、40年余りが経つ。近年では語彙知識の測定について精緻化を追求する研究が増え、それと同時に何を「一語」として数えるべきかについて、改めて議論がなされている。

語彙研究において語を数える単位は様々にあるが、主だったものはレマ（lemma）、フレマ（flemma）、ワードファミリー（word family）の３種類である。この中で、人称や時制、および名詞の単複による屈折変化のみをひとつの単語とまとめ、あらゆる派生形を別々の機会に学習する必要があると想定するレマは、学習者の語彙知識を過小評価するものである。一方、数多くの派生形を含めて一語とみなす、つまり学習者がそれらの派生形を目にしたときにはその意味が理解できるという前提に立つワードファミリー（Bauer & Nation 1993）には過大評価の懸念があるというのもまた、多くの研究者の間で共有された見解である。フレマはその中間的単位として近年提案されたもので、学習者が品詞を超えた知識を応用できることを想定はするが、同一の語形が複数の品詞にまたがって使われる場合を一語とみなすのみであり、派生形は別単語とみなしている。結果として、フレマが前提とする学習者の知識や能力は、ワードファミリーの場合と比較してはるかに控えめなものとなっている。

ワードファミリーは品詞や派生形に関する知識を学習者が持っていることを想定しているが、実際に学習者は必ずしもそのような知識を持ち合わせていない場合がある。例えばMcLean（2018）は、日本人英語学習者を対象にワードファミリーに括られる語群の知識を調査した結果、同じワードファミリー内でも語形によって認知度に大きく差が開くことを示し、ワードファミリーの使用は少なくとも日本人学習者を対象とする場合には適切ではなく、フレマを使用するべきだと主張している。

これに対して、Stoeckel, Ishii, & Bennett（2020）は、フレマの前提は果たして満たされているのか疑問を呈している。すなわち、例えば学習者が動詞としてのedit（編集する）を知っていれば名詞としてのedit（編集）を理解することに困難がないと言えるのかは定かではない。実験の結果、学習者が少なくとも1つの品詞で知っている単語について、約半分のケースでしかもう1つの品詞での意味理解を確認することができず、フレマの前提が成立していない場合があることを示した。

しかしながら、この品詞をまたぐ意味の操作は一見単純なように見え、学習者がなぜ困難を抱えるのかは理解が難しい。その理由および教育的示唆を求めて、Ishii, Bennett, & Stoeckel（2021）では、学習者に対するインタビューを通じ、一つの語形を複数の品詞として文の中で意味を理解するために必要とされる知識や能力、および学習者が直面する困難について調査した。この調査は、Stoeckel, Ishii, & Bennett（2020）と共通の素材を利用し、以下のような対をなす文について日本語に訳すことを求め、それぞれにどのように考えてそれらの訳を導き出したのか、また何を難しいと感じたかについて聞き取りをした。

Can you remember this quote?
Can I quote you?

その結果、調査の対象となった10語、計20文のうち約20%のケースで、異なる品詞の知識を積極的に活用した、すなわちフレマの前提が満たされていることが示唆された。一方で、同じく約20%のケースで、ある品詞では語意を正しく解釈できているにも関わらず同一の形が異なる品詞で使用された場合に意味解釈が成立せず、フレマの前提が満たされていないことが示された。後者の要因として、インタビュー調査では学習者と単語の性質の双方に要因があることが見えてきた。

例えば名詞として知っている単語（quote＝引用）を動詞として認識する（quote＝引用する）ためには、学習者はまずその語形を認識し、文の中での使われ方が自分が知っている品詞とは異なることを認識し、どの品詞として使われているのかを理解し、意味に思いを巡らせることが必要である。比較的文法能力の限られた学習者にとっては、文の中である単語がどの品詞として使用されているかを正しく認識することができず、その結果として品詞情報を無視して、自分が知っている訳語をつなぎ合わせてつじつまの合う意味を合成してしまうことがある。

また、品詞の特定までは問題なく進めたとしても、同じ語形が複数の品詞をまたいで使用されている時、quote（引用／引用する）のようにその意味の変化がとても分かりやすいものから、variable（変化し得る／変数）のように個別に学習する機会がなければ、推測だけで正しい意味にたどり着くことが難しいものもある。改めて複数の品詞にまたがって使用される語を集めて眺めてみると、品詞間での意味の対応関係が一様ではないことに気づかされる。

先に述べた通り、フレマはワードファミリーに比べると、学習者が持っていると想定する知識や能力が限定的で、ワードファミリーよりは学習者の目線に立った語の数え方と言える。しかしながら、学習者および単語の性質双方の要因によって、フレマでさえもその想定が満たされないケースがあることが分かった。母語話者や上級の英語使用者は、品詞をまたいだ意味の変換をいとも簡単にかつ自然に行ってしまうため、そこに学習者にとって様々なつまづきの要因が存在するということを忘れがちである。

一方、フレマの前提を成り立たせるような品詞感覚、文法能力、および意味推測における柔軟性が、英語学習上とても重要なものであることも間違いない。単に「フレマでは学習者の語彙能力を過剰評価してしまう恐れがある」と結論づけるのではなく、フレマの前提を少しでも満たせるような学習者を育てていくこともまた重要であり、それは本学においては「英語コミュニケーション」等の英語科目の今後の課題であると言える。

【引用文献】

Bauer, L., & Nation, P. (1993). Word families. *International Journal of Lexicography, 6,* 253–279.

Ishii, T., Bennett, P., & Stoeckel, T. (2021). Challenges in the assumptions of using a flemma-based word counting unit. *Vocabulary Learning and Instruction, 10* (1), 1–15.

McLean, S. (2018). Evidence for the adoption of the flemma as an appropriate word counting unit. *Applied Linguistics, 39,* 823–845.

Stoeckel, T., Ishii, T., & Bennett, P. (2020). Is the lemma more appropriate than the flemma as a word counting unit? *Applied Linguistics, 41*(4), 601–606.

月例研究報告

中国語方言グッズの世界

日高　知恵実

みやげもの店で方言が表記された商品を目にしたことはないだろうか。筆者が長年居住していた石川県金沢では、「あんやと」とくりぬかれた木製ブックマークが販売されていた。大阪では「おおきに」「すきやねん」「まいど」などと焼き印されたカステラが店頭に並んでいるようである（図1）。こうした方言が表記された商品（本稿では方言グッズと呼ぶ）は方言産業の１つで、方言を活用することで経済的な価値を付加している。上述のカステラも焼き印がなければただのカステラであるが、「おおきに」と焼き印を入れることで、大阪みやげとしての価値を出しているわけである。

方言グッズは日本特有のものかと思いきや、そんなことはない。試しにウェブ上でdialect mugと画像検索してみると、英語圏の方言がびっしりと記されたマグカップが出てくる。図1で挙げているのは、イングランド北東部に位置するニューカッスルの方言、いわゆるジョーディーの音声特徴を表記したマグカップである。イングランドの人びとが話す英語は、南部方言と北部方言に大別される（田中2012:21）。北部方言に属するジョーディーは大母音推移以前の古い形式を残しているため、例えば二重母音［aʊ］は［u:］と発音される。aboutをABOOT、cowをCOOと表記しているのは、こうした音声特徴を反映させるためである。

図1　日本とイングランドの方言グッズ [1]

筆者がフィールドとしている中国においても、中国語の方言グッズは存在する。ここでの中国語の方言とは、中国の人口の9割以上を占める漢民族が話す「漢語」の方言を指す。筆者が現物を入手しているものに加えてウェブ上での販売が確認できたものを合わせると、トランプ、カレンダー、絵はがき、Tシャツ、トレーナー、バッジ、ステッカー、しおり、マグネット、スマートフォンケース、キーホルダー、コースターなどがある。杭州唄殼説網絡科技有限公司が販売している観光ステッカーは、パッケージに「旅行商品」の文言が見える。一般的に「旅行」から連想されるのは、観光名所、食文化、伝統芸能などであるが、このステッカーではさらに方言に関するものも

1つのパッケージに詰め込まれており、方言が観光資源の一要素として売り出されていることが読み取れる（図2）。

(1)方言グッズ生産に至った社会背景

日本において方言グッズが生産されるようになった背景には、近代以降における方言の社会的位置づけの変化がある。明治維新のあと、すなわち近代国家へと歩み始めた頃は、「日本国民は、国語を身につけなくてはいけない」として、東京のことばをもとにした標準語が懸命に教えられ、方言は撲滅すべき対象であった（井上2007：37）。しかし戦後、標準語・共通語の普及が進み、方言が衰退すると、標準語普及の「障壁」のように見なされていた方言は一転して保護される対象となる。また希少価値が高まったことによって、マイナスだった方言への評価がプラスに転じ、方言を楽しんだり、産業に結びつく風潮が生まれた。

中国における状況も、基本的には日本と同じである。時代的には日本よりも30年ほど下るが、やはり標準語の普及、方言の衰退、方言の保護、方言による娯楽という段階を踏んでいる。ただし、中国では現在においても標準語の普及が国の重要課題であるため、方言の保護は標準語化との兼ね合いで進められていると言えよう。識字率の向上もまた、方言グッズの生産およびその受容に繋がったと考えられる。

(2)中国語方言グッズの方言表記

では中国方言グッズには実際にどのような方言が表記されているのだろうか。方言グッズとしての価値を持たせるには、標準語とは異なる言語特徴を前面に出すことが求められる。そのため、ある地域で限定的に使われている特徴的な方言語彙は選ばれやすい。

中国西南部に位置する四川の方言グッズを例として見ていこう。図2にある成都方言トランプの札には「方脳壳（方脳殻）」と表記されている。「方」は「四角い」、「脳壳」は「頭」を指すため、「四角い頭」すなわち「頭の固い人、融通の利かない人」という意味を持つ。「頭」を「脳壳」と呼ぶのは四川一帯に限定されることから（陳章太ほか1996：2497）、まさしく四川方言の特徴語と言える。

標準語と四川方言の同形異義語を取り上げているものもある。図2の成都トランプの札に見える「耍朋友」は、標準語では「友だちをからかう」という意味だが、四川方言では「恋人を探す」「恋愛をする」ことを指す。一方、図2のオレンジ色のステッカーに大々的に刻まれた「好吃狗」の3文字は、標準語として理解するならば「美味しい犬」のように読めてしまうが、四川方言では「よく食べること」を指し、主に食いしん坊な子どもの様子を形容する際に用いられる。

語彙だけでなく、方言音を標準語で同音・類音となる漢字を用いて音写しているものもある。図3の絵はがきをご覧いただきたい。標準語では「話す」を「说」[ʂuo]と言うが、四川方言では[so]

と発音する。方言絵はがきでは、この［so］を標準語の発音に基づいて「嗦」と表記している。標準語の「嗦」（厳密には2音節語の「啰嗦」）は「くどくど言う」という意味があるため、「全世界で四川方言をくどくど言う」といった本来とは異なるニュアンスに変わる。方言音を再現するだけでなく、漢字が表語文字であるという特性を生かすことで、いわゆる「当て字」（仮借）の要領から面白さを意図的に創り出しているのだ。

図2　四川方言のステッカーとトランプ

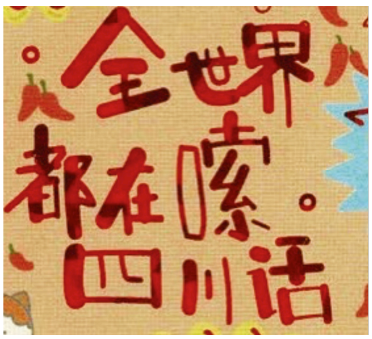

図3　四川方言絵はがき（一部）

（3）方言グッズの地域的偏在を生み出す要因

こうした中国語方言グッズは中国各地で一様に存在するのではなく、地域的な偏在が見られる。筆者がこれまでに収集した43種類の中国語方言トランプで言えば、中国東南部に分布する南方方言に属するものは2種類のみで、残り41種類はすべて中国北部および西南部に分布する北方方言のものであった。こうした地域的な偏在を生み出す要因は、1つには中国語の方言のあり方と密接な関わりがあると考えられる。

詹伯慧（1981＝樋口訳1983：118）は北方方言内部の均一性の高さについて、以下のように説明する。

> 北京話を代表とする北方方言は、その内部の一致性がかなり大きい。東北三省（遼寧、吉林、黒竜江）から西南三省（四川、雲南、貴州）まで、直線距離にして数千キロに及ぶが、使用される言語は、同じ北方方言の系統に属しているので、漢人同士のコミュニケーションにはなんら困難がない。（後略）

現代標準中国語は北方方言を基礎方言としているため、標準語が理解できれば同系統にある北方

方言も一定程度は理解できる。これはことばの面白さを感じられる最低条件を満たしていることに繋がる。

一方、南方方言はというと、たとえ中国人であっても地元民でなければ外国語並みに理解が難しい。詹伯慧（1981＝樋口訳1983:16）は「東南一帯では、県と県、村と村の間でさえ言語コミュニケーション上の困難が存在することもある」と述べている。南方方言は濁音や入声など北方方言が保有しない音を保有していたり、声調数の多さが障害となって、標準語音に基づく音写が十分にできないという問題もある。こうした北方方言と南方方言の相違は、方言を表記しそれを商品化するという方言グッズの特性に大きく関わっている。

近年では若者を中心に、在来の土地のことばとしての方言があまり話されなくなってきた。しかし一方では、今回取り上げた方言グッズのように、生活語以外において積極的に受容・活用しようとする動きも起きている。方言の新たな活用の実態を把握し、地域で話されてきた方言とどのように異なるのか、これからも探求していきたい。

【注】

(1) 画像は以下のウェブページより引用し、一部加工もおこなった。
「minne」石川県の方言「あんやと」木製ブックマーク
https://minne.com/items/30910042（2023年1月5日 最終閲覧）
「JR西日本みやげショップ」おおさかシティーウォーク
https://jrwest-omiyage.com/item-detail/1261355（2023年1月5日 最終閲覧）
「MP Homewares」Dialect - Geordie Ceramic Mug
https://minne.com/items/30910042（2023年1月5日 最終閲覧）

【参考文献】

井上史雄『変わる方言　動く標準語』、筑摩書房、2007年。
詹伯慧『現代漢語方言』湖北人民出版社、1981年。（樋口靖訳『現代漢語方言』、光生館、1983年。）
田中春美、田中幸子『World Englishes―世界の英語への招待』、昭和堂、2012年。
陳章太、李行健『普通話基礎方言基本詞彙集』第3巻、語文出版社、1996年。

月例研究報告

1年生からの自己決定型学習を奨励する：ドイツ語の授業における電子ポートフォリオの活用について

コンスタンティネスク・チェザル

(1)研究プロジェクトの概要

日本の大学における初習言語の授業は大抵の場合、春・秋学期にそれぞれ15コマないしは14コマと授業時間が限られている。このような事情のもとで、授業の内容を進行状況に柔軟に対応させ、またウエッブサイトや動画などのネット上の資料を簡単に授業に取り入れることができる方法を模索した。さらに電子ポートフォリオを利用し、学生が各自の学習記録をつけることによって、彼らが授業時間外に自由に取り組んだ学習を教員が把握することを可能にした。学生にとって新しい学習方法だが、オンラインの資料やポートフォリオを使った学び方について履修者を個別にインタビューし、質的調査によって分析した。

(2)モジュール型オンライン教科書の開発

2021年度には初級のドイツ語クラスにおいて、出版された教科書を一切使わず、実験的に独自に作成した教材やインターネットで自由かつ無料で入手可能な資料を使用し授業を実施した。その際、MoodleとPadletという二つのプラットフォームを用いて、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）のA1レベル相当の内容を扱うドイツ語授業用のオンライン教科書の開発を試みた。トピックや授業の進行に関しては、ドイツ語圏で出版されている教科書を参考にしたが、学習内容を1学期15コマの授業に合わせることで、日本の授業形態に対して適切なフォーマットで提示することを目指した。このコンセプトを授業内容と学習目的の点で同じ3つの授業で応用した。さらに、2022年度は引き続き２つの授業で使用し、秋学期から授業形式がオンラインから対面に切り替わった際にも電子教材の利用を続けた。

2021年度には、ネット上のウエッブサイトや動画、授業中の課題や宿題、文法や語彙に関するヒント、そして自分で制作した「ミニ講座」の動画などのコンテンツを毎週適宜追加し、それらの資料で構成されるオンライン教科書を徐々に完成させていった。こうしたプロセスのゆえに、また教育上の理念からも、出来上がった教科書は従来の出版された教科書と比べると不完全とみなされうるものであった、というのも文法や語彙の練習問題、単語リスト、文法の解説が含まれていないからである。学習者自身に未完成の部分を他の情報源から補完してもらう必要があるが、それによってオンラインの辞典やその他の参考資料を適切に活用し、自分の力で継続的にドイツ語の学習が出来るようになることがそこに期待されている。

授業目標は主に、Goethe-Zertifikat A1：Start Deutsch 1という初級レベルの口頭試験で出される自己紹介の問題に基づき、「名前、年齢、出身地、職業や勉強、住んでいる場所、話せる言語、趣味」といったテーマに関する短いやり取りができるようになることである。また、そのやり取りにおいて相手が言うことを理解し、自分のことを伝え、そして相手に情報をたずねることも望まれる。学生がそのやり取りに必要な文法や語彙を身に付けるため、授業の内容に合った動画やウエッブサイトを探し、適切な課題を考案した。ネット上でアクセスできる資料なので、その情報源への

案内にもなり、学生がそれらの動画などのコンテンツを実際にどのように自己学習に使うことができるかをアドバイスした。授業中の課題や授業時間外の復習と予習の課題もPadletに載せた。

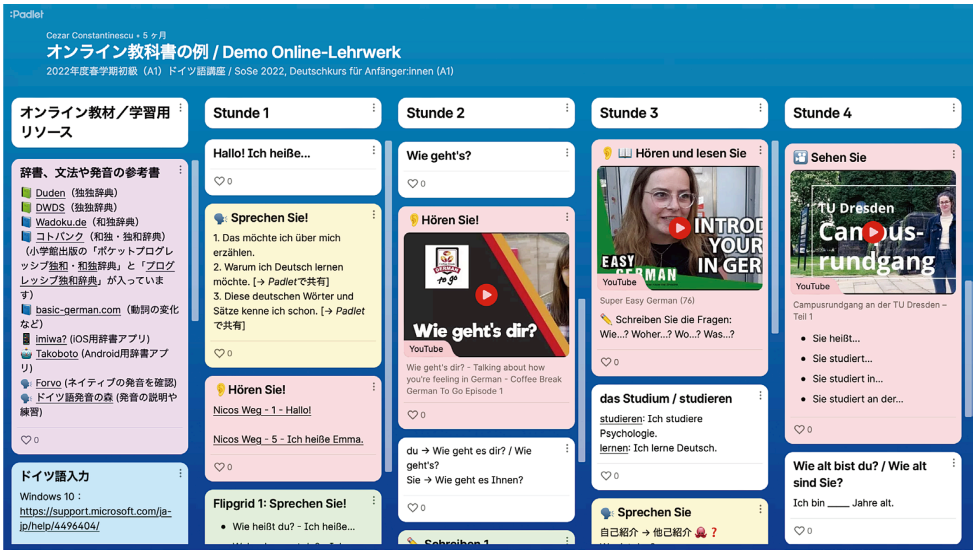

図1：Padlet上のオンライン教科書の例
https://padlet.com/kon50/demo2022にて公開中

教科書に利用したPadletのフォーマット（図1）の特徴は、四角い投稿を引っ張って移動できることである。予定していた内容を授業中に取り扱う時間がなかった場合は即時に次回の欄（つまり次回の授業）に持っていくことができる。授業中に説明を追加するなどの編集も容易に行うことができる。

ログイン不要でリンクさえあればアクセスができるPadletに加えて、教育管理システムのMoodle上でもコースサイトを作成した。Padletで長い文章を追加すると全体的に見づらくなるので、追加の解説や課題の説明をそこに掲載した。また学生用のフォーラムなどMoodle独自の機能を使いながら、ネット上での公開が望ましくない資料の提供や課題の提出にも使用した。

インタビューを通して得た、授業資料に関する学生の感想においては、一見して授業の内容を確認できる点が高く評価された。それはまさにPadletの強みであると考えられる。さらに電子資料であるがゆえに、ポートフォリオに追加したい内容を簡単に授業用のPadletやMoodleのサイトからコピー出来るため、復習がしやすいという意見があった。

(3)電子ポートフォリオの活用

モジュール型教科書の考案にあたって学生の評価方法についても考え直すことになった。言語知識の習得のみならず、自分に合った独自の学習法を身につけるに至ったか、学習に適切な資料と取り組み、継続的なドイツ語学習が成立したかを確かめたいと思ったのである。さらにオンラインで

も対面でも不公平の生じない評価方法を考え、結果としてポートフォリオという形式を選んだ。授業で気になった内容、予習・復習の内容やその他自発的な学習の成果を学生に毎週ポートフォリオに記載してもらった。また、オンラインのポートフォリオであるため、学生による更新が行われると教員がすぐにその内容を確認できるので、課題に関するコメントなどを追加でき、学生と教員の間のコミュニケーションツールとして活用することもできる。毎週数十人のポートフォリオを確認する余裕がなかったとしても、定期的に確認して、学生から相談がある場合もすぐに学習内容を確認できるのは大きな利点である。

ただし、文章や口頭で指導したにもかかわらず、ポートフォリオの書き方で悩む学生もみられた。それでも秋学期になると多くの履修者は自分なりのポートフォリオの使い方に「たどり着いた」と確認することができた。どのようなことをポートフォリオに追加するか、自己学習に関してとりわけ何に注力するかによってそれぞれの学び方が明確になってくる。さらに、私からの提案を受けて、ポートフォリオに他のドイツ語の授業で学んだことや取り組んだ課題と自己学習を記録する学生も数名みられた。学生にとってただ一つの授業のためではなく、ドイツ語の学習全体を記録するためのツールにすることができたのは期待以上の結果だった。

（4）教員としての振り返りと今後の課題

考案した教授コンセプトを２年間に渡って調整しながら使用してきた。私が授業に相応しいと考える資料をその都度教材にして、必要に応じて授業内容をクラスのニーズに合わせて容易に修正することができた。それによって学生にも「面白い」や「楽しい」といった評価をされる授業にすることに成功したと考える。市販の教科書に頼らず学生に無料の教材を提供できることにも満足している。今日、インターネット上には学習に活用することができる資料が無数にあり、その中で教員がそれをより適切に利用し、いかにして効果的に勉強できるかを学生に示すことに価値が見出される。それこそがまさにオンライン教科書の目的である。また、アクセスすることができる資料が豊富にあることを考慮すれば、授業時間外に興味のある内容に取り組むことのできる自主性を学生に認める必要がある。教員はそうした自由な学習の内容ではなく、学生が責任を持って自分なりに勉強することができたということ自体を評価することが望ましい。それがポートフォリオの役割である。学生に与える自由と教員からの指導のバランスに関しては今後も考慮すべき課題の一つである。

今までは学期に一度、各学生と学習全体やポートフォリオの利用について話し合う「ポートフォリオ面談」の時間を設けていた。一人あたり15分という短い時間ではあるが、ドイツ語を学ぶモチベーションや学習に関して不安な点、そして授業への期待を確認することができた。その話し合いから得た情報は授業内容とポートフォリオの調整に活用され、貴重な時間となった。特に、新しいコンセプトを実践する際には学習者との対話が不可欠であり、そのためこれからも学生と話し合いをしながらより適切な教材や教授法を探り続ける。

月例研究報告

走りのスポーツ科学研究

杉崎　範英

「走る」という動作は、誰に教わることもなく発育に伴い自然に発生する人間のもっとも基本的な動作のひとつであり、人々ははるか昔から走りの速さを追求し、競い合ってきた。短距離走競技の起源は大変古く、古代オリンピックの第1回から第13回までの唯一の競技は、約190mの速さを競うスタディオン走であった。短距離走競技者たちがいかに真剣に走りの速さを追求していたかは聖書からも見て取れる。新約聖書9章コリントの使途への手紙第24節〜27節には以下のように記されている。

24　あなたがたは知らないのか。**競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけ**である。**あなたがたも、賞を得るように走りなさい。**
25　しかし、**すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。**彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。
26　そこで、わたしは**目標のはっきりしないような走り方をせず**、空を打つような拳闘はしない。
27　すなわち、**自分のからだを打ちたたいて服従させる**のである。そうしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない。

このように、当時から競技者は、節制し、速く走るという目的を明確に持ち、体を鍛えあげていたことが伺える。そして、その努力の程度は、使徒パウロが、福音のため行うべき努力の例えにあげるほどであったことが読み取れる。

スタディオン走の起源は、神に供物を捧げる権利を競うという宗教的な行為であり、古代における短距離走競技の目的は、現在のそれとは異なる意味を持っていたかもしれない。しかしながら、いずれにせよ、走りの速さは、少なくとも古代ギリシャ時代からおよそ3000年間にわたって真剣に追求されてきたといえる。この長い年月にわたる努力の結果、人類は昔よりも速く走ることができるようになり、現在も短距離走パフォーマンスの向上は続いている。

では、この長い間続いてきた短距離走パフォーマンス向上に、スポーツ科学がどの程度、あるいは、いつから貢献してきたのだろうか。実は、数千年の短距離走の歴史的スケールで考えると、短距離走パフォーマンス向上にスポーツ科学が顕著な貢献をするようになったのはごく最近であり、具体的には1991年世界陸上東京大会が大きな節目とも言われる。ごく最近になってようやく科学が大きく貢献できるようになった理由の一つは、スポーツ科学の発展が技術の発展と密接につながっていることにある。すなわち、撮影技術や測定技術の発展が大きな要因といえる。あくまでも私の感想であるが、3000年におよぶ努力の結果、人間の疾走パフォーマンスは限界に近付いてきており、

経験や勘のみに頼った方法（トレーニング）では、これ以上のパフォーマンス向上は難しいように感じる。しかしながら、現在も科学技術は加速度的に発展していることから、スポーツ科学の発展も継続すると予想される。スポーツ現場の経験や勘と科学を上手く利用することで、まだしばらくは短距離走パフォーマンスを改善できると期待している。

スポーツ科学研究には、様々な切り口があるが、現在私が取り組んでいるのは、力学的なアプローチを用いた研究である。物理法則によれば、物体は力が加わることによって加速する。身体は質量を持った物体であるから、身体速度、すなわち疾走速度は身体に課される力の大きさと向きに依存することとなる。疾走中に身体にかかる力は、重力と空気抵抗（抗力）、そして足部を介して地面に加えた力の反力である地面反力の３つのみである。このうち基本的には、重力は一定、また空気抵抗は疾走速度に依存して受動的に課されるものであり、唯一競技者が能動的にコントロールできるのが足部を通じて地面に発揮する力、そしてその反力である地面反力である。本報告会の後半では、私が研究サバティカル期間中に行った地面反力測定を用いて行った研究として、①疾走動作の力―速度関係の特徴、および②牽引負荷が疾走動作の力―速度関係に及ぼす影響という2つの研究の概要を紹介した。研究内容の詳細については、公表前のため割愛するが、従来の研究報告とはやや異なる結果が得られている。力―速度関係という、身体運動科学において最も基本的な概念においても確定的な結論が得られていないということは、スポーツ科学の発展によってさらに短距離走パフォーマンスを向上できる可能性があることを示唆しているとも捉えられる。スポーツ科学者としての究極の目的は、スポーツパフォーマンスの向上に寄与することである。今後はさらに研究を発展させ、現場のトレーニングへの応用を通じて、選手のパフォーマンス向上に貢献したいと考えている。

月例研究報告

小角X線散乱測定による炭素材料中の細孔構造評価

福山　勝也

活性炭などの多孔質炭素材料中に存在する細孔を評価する手法として、窒素等の分子吸着による方法が広く用いられている。しかしながら、この分子吸着による方法は外表面に通じている細孔（開気孔）のみがその対象となり、外表面に通じていない細孔（閉気孔）については、その情報を得ることは不可能である。

小角X線散乱（Small-angle X-ray Scattering：SAXS）は、X線が透過する系中に、ナノメートル（10^{-9}m）オーダーの粒子や空隙など、周囲と電子密度が異なる領域が存在する場合、その領域の大きさや形状を反映した散乱パターンを生じる手法であるため、これを多孔質炭素材料の細孔構造評価に適用した場合、細孔の開閉を区別することはできないものの、細孔の開閉を問わず用いることが可能である。しかしその一方で、SAXSではその基本的な解析理論において、散乱体である粒子あるいは細孔が均一のサイズ、均一の形状を有し、かつ、孤立して存在しているとみなすことができるという条件を仮定している。すなわち、粒子あるいは細孔の大きさや形状がそろい、かつ、評価対象である散乱体同士がお互い十分離れて存在することにより散乱体間の相関が存在しない、もしくはほとんど無視できるという条件が測定データを解析する上で極めて都合がよいということになる。溶液系試料に対するSAXS測定の場合、評価対象である散乱体間の相関を無視できる程度にまで実験的にその濃度を十分希釈し調整することは可能であるが、一般的な炭素材料の細孔構造評価においてそのような条件を作り出すことはほぼ不可能である。そのため、炭素材料に対するSAXS測定では、評価対象である散乱体、すなわち細孔同士が比較的近距離に存在していることにより生じる細孔間の相関がその散乱パターンに与える影響を無視できない場合が多く、また、個々の細孔の大きさや形状も一般に不均一で複雑であるなどの理由から、そのSAXS測定結果の解釈は必ずしも容易なものではないのが実情である。このことは同時に、炭素材料の構造解析手法として広く普及しているX線回折（X-ray diffraction：XRD）測定に比べて、SAXSも同じくX線を用いた手法であるにもかかわらず、広く普及するに至っていない理由の一つにもなっている。

そこで筆者らは、炭素材料中の細孔構造評価におけるSAXS測定の理想的な試料条件を実現可能な手法として、熱処理および炭素化処理により炭素マトリックスを与える「炭素前駆体樹脂」と、熱処理により消失しその部分に細孔を与える「細孔形成（熱消失性）樹脂」とを混合した「ポリマーブレンド」による多孔質炭素材料の調製に着目した。この方法では、用いる細孔形成樹脂の粒径を選択することや、両樹脂の混合比を変えることによる濃度調整が可能であるため、結果として得られる細孔の大きさや形状が比較的揃い、かつ、細孔数（濃度に相当）をコントロールすることにより細孔間の相関を無視できる程度にまで細孔を減じることが可能となり、ゆえに、SAXS測定結果を解釈する上で極めて好都合な散乱パターンを得ることが可能となることが期待できる。

今回の研究報告では、ポリマーブレンド法により調製した多孔質炭素繊維中の細孔構造について、基本的な解析理論による解析に加え、理論散乱曲線とのフィッティングによる解析、さらに、炭素化処理前のポリマーブレンド繊維中における細孔形成樹脂の形状評価をおこなった結果をあわせ、

細孔形成へと至る一連の構造変化を考察した結果について紹介した。

炭素前駆体樹脂としてノボラック型フェノールホルムアルデヒド樹脂を、また、細孔形成（熱消失性）樹脂として公称粒径30nmのポリスチレンビーズをそれぞれ用いた。ポリスチレンビーズをノボラック型フェノールホルムアルデヒド樹脂に対して10wt％混合したポリマーブレンドを、135～140℃で紡糸、その後不融化処理を施したのち、これらを500℃ならびに1000℃にてそれぞれ熱処理したポリマーブレンド繊維炭素化物、さらに、炭素化処理を施していないポリマーブレンド繊維の、計3サンプルを測定に供した。

SAXS測定は、回転対陰極型X線発生器、検出器に1次元検出器である位置敏感型比例計数管（Position Sensitive Proportional Counter：PSPC）を用いた装置によりおこなった。入射X線波長は0.15406nm（CuKα_1）、試料位置から検出器PSPCまでの距離（カメラレングス）は1200mmである。なお、測定（露光）時間は各試料とも1800秒でおこなった。

各プロットによる解析結果から見積もられた炭素繊維中の細孔の構造パラメータは、各プロット間において互いに相補的かつ補完的なものとなった。炭素材料中の細孔構造評価におけるSAXSの適用例は多く報告されているものの、一般に複雑である炭素材料の細孔構造の解析において、本報告に示したように多角的にしかも矛盾なく解析できたことは極めて稀なことであると言える。ゆえに、このポリマーブレンド由来の炭素試料をSAXS測定による細孔構造評価における標準的な試料として位置づけることができたものと考えている。

加えて今回、これまでの各プロットによる解析結果の妥当性の検討、ならびにより詳細な解析をおこなうことを目的として、SAXSの理論散乱曲線を用いたフィッティングによる解析を導入した。これまでの各プロットによる解析では、500℃、1000℃試料中の細孔の形状をどちらも円柱形であると仮定しておこなっていたが、理論散乱曲線フィッティングによる解析の結果、両試料中の細孔の形状は、いずれも異方的な形状を有しているものの、500℃試料中の細孔は異方性がより低く、また、円柱様形状よりは回転楕円体に比較的近い構造を有していることが示唆された。一方、1000℃試料中の細孔は500℃試料中の細孔よりも異方性が高く、また、細孔の胴囲は500℃試料中の細孔と同様に若干回転楕円体のように膨らんではいるものの、500℃試料中の細孔よりも円柱形に比較的近い構造を有していることが示唆された。

さらに、炭素化処理前のポリマーブレンド繊維のSAXS測定データについても理論散乱曲線によるフィッティングをおこなった。これにより、炭素化処理前のポリマーブレンド繊維中における細孔形成樹脂の形状は、短軸長10.6nm、軸比1：3.2の回転楕円体を想定するとうまく一致する結果が得られた。また、ここで得られた各構造パラメータは、仕込んだポリスチレンビーズの公称粒径とオーダー的にもよい一致を示した。

細孔形成樹脂であるポリスチレンビーズの形状変化から、熱処理・炭素化処理にともなう細孔形成、ならびに細孔構造変化へと至る一連の変化についてまとめてみる。まず公称粒径30nmのポリスチレンビーズが、紡糸操作により短軸長10.6nm、軸比1：3.2の回転楕円体へと変形し、その後500℃処理により、7.0nm程度の胴囲を有する比較的回転楕円体に近い形状を有する異方性の細孔となり、さらに1000℃処理を施すことにより、胴囲が5.9nm程度で若干回転楕円体のように膨らんではいるものの、比較的円柱形に近い形状を有する異方性形状の細孔へと変形していく、というものである。

なお、今回は細孔形成樹脂であるポリスチレンビーズの形状変化、ならびにそれに由来する細孔についてのみを対象として考察した。しかし、炭素前駆体樹脂として用いているノボラック型フェノールホルムアルデヒド樹脂は、その炭素化により、いわゆるガラス状炭素を与える樹脂である。ガラス状炭素中には細孔が存在すること、また、その細孔が熱処理温度の上昇にともなって成長していくことを我々はすでに確認している。1000℃程度であれば、いわゆる下地の樹脂に由来する細孔はまだそれほど大きくはなく、ゆえに、細孔形成樹脂由来の細孔構造の評価に大きく影響を与えることはないものと考えられるが、熱処理温度が上昇するにしたがって炭素マトリックス部分に由来する細孔の影響を無視できなくなる可能性は十分に考えられる。今後さらなる高温処理を施した場合の、下地マトリックス由来の細孔による影響についても考えてみたい。

また、SAXS測定においては、散乱体間の相関が認められない場合であっても、散乱体の濃度が高い場合、その散乱体の大きさは実際よりも小さく見積もられるという傾向があり、散乱体の真の大きさを見積もるためには、横軸に散乱体の濃度、縦軸にそれぞれの濃度で見積もられた散乱体の大きさを採ってプロットしたグラフの、濃度ゼロに外挿して得られる値を用いるべきである、という指摘もある。今回は濃度依存性についての議論はおこなわなかったが、散乱体間の相関に対する解析の検討も含め、あわせて今後の課題としたい。

最後に、今回の研究報告会では、出席者から「これは何に使えるのか」といった類の質問を受けた。当日はうまく説明することができなかったが、活性炭や備長炭などに代表されるように、多孔質炭素材料の細孔（開気孔）は分子を吸着する性質を有している。今回紹介したポリマーブレンド由来の炭素繊維試料中の細孔は閉気孔であるため、ただちにこの試料自体に分子吸着等の応用面を期待することは難しいと思われるが、ポリマーブレンド法によって炭素材料中の細孔の大きさをデザインすることが可能であることから、例えば、ある分子に対する吸着能と細孔の大きさや形状との関係性を見い出すことができれば、そこからいわば逆算して、有害な分子をより効率よく吸着除去するための多孔質炭素材料の開発へと繋がっていく可能性があると考えていることを、ここに付言する。

03

ランゲージラウンジ
活動報告

03

2022年度ランゲージラウンジ活動報告

教養教育センター　ランゲージラウンジ運営委員会

1. 総括

2008年に始まったランゲージラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて、学生たちが自律的に学習できる環境を整えることから始まった。現在は、英語とスペイン語においてILSSP（Independent Language Study Support Program）を開設し、学習者自らが具体的な目標を設定して、その目標に向かって定期的にチューターと面談しながら（英語）、あるいはオンライン学習ツールを用いて（スペイン語）、自律学習ができるような支援を行っている。

これらの活動に加え、言語（ドイツ語、スペイン語、中国語、韓国語、フランス語）ごとに曜日・時限を決めて、母語話者との会話実践の場を提供したり、日頃の学生の外国語学習のサポートを行ったりしている。

今年（2022）度も昨年（2021）度に引き続き、新型コロナウイルスの流行により、ランゲージラウンジもオンラインを活用しながら実施したが、秋学期からは大学の授業が全面的に対面式となったこともあり、可能な範囲で対面の要素を取り入れることができた。オンラインでの実施は大変な面もあったが、活動に携わる教員にとっても語学教育のあり方を見直す良い機会となったように思われる。

次年度についても、対面かオンラインかを問わず、引き続き母語話者との交流の機会を増やし、言語がコミュニケーションの道具であることを実感できるような場を増やすことを目標に、多様な外国語学習の支援活動を行っていきたい。

2. 活動詳細

2.1　英語部門：鈴木陽子

英語部門では、昨年度に引き続き、二種類の自律学習支援プログラムを実施した。一つは、一学期間にわたって自律学習を支援するIndependent Language Study Support Program（ILSSP）、もう一つは、一回のセッションから参加可能なEnglish Clinicである。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、春学期はすべてのプログラムをオンライン（Zoom）にて行った。秋学期は、対面授業が基本となったが、ここ数年で白金キャンパスに通う3、4年生の参加者が増えてきていたことから、対面とオンラインの両方で実施した。

ILSSPは、本学非常勤講師の山森由美子氏および坂井誠氏を担当者とし、月曜日（11：00–15：30）と水曜日（11：00–15：30）に実施した。担当者は各学生が設定した目標に沿って教材や学習方法を提案し、ポートフォリオ（学習記録）を活用して、自律的に学習計画や目標が立てられるよう助言を行った。春・秋学期共に受け入れ可能な人数を超える申し込みがあったが、個別指導という性質から、希望する学生全員にプログラムを提供することは叶わなかった。そのため、参加申込書に記入された英語学習の目標を勘案して選抜を行った。各学期の学科ごとの参加者数は表1の通りである。

表1　ILSSPの実績

	LE	LF	LA	EE	EB	EG	SG	SW	JU	JC	JP	JG	KS	KC	PS	PE	計
春	2	0	0	5	0	0	3	1	0	2	0	1	2	0	1	1	18
秋	0	0	1	0	0	1	3	1	0	0	2	2	7	1	2	1	21

English Clinicは、ILSSPに参加することができなかった学生や英語学習に関するさまざまな質問や悩みを抱える学生に向けたプログラムである。本学非常勤講師のTom Webb氏および田辺玲子氏を担当者とし、春・秋学期共に火曜日と金曜日の昼休み（12：40〜13：20）に実施した。担当者は、各学生が抱える相談内容に応じて、文法や語彙、発音に関する質問に答え、英語の学習方法や留学関係書類の作成について助言を行った。また、英語でアウトプットする機会を求める学生に向けて、英会話やプレゼンテーションの練習ができる機会を提供した。各月の参加者は、春学期は5〜12名（6〜13セッション実施）であった。秋学期は、対面でもオンラインでも参加ができるよう実施形態を変更したものの参加者が減少し、各月（9月を除く）の参加者は2〜4名であった（2〜6セッション実施）。オンラインでの実施によりキャンパスを問わず参加が可能となったため、今年度も3、4年生の参加者が一定数あった。来年度もプログラムの周知に力を入れ、多くの学生に利用してもらえるよう努力を続けたい。

2.2　ドイツ語部門：コンスタンティネスク　チェザル

2022年度ランゲージラウンジ（ドイツ語）は『ドイツ語deランチ』と題し、森本康裕氏（本学非常勤講師）が担当した。今年度は春学期途中から対面授業が再開されたため、対面授業再開まではオンラインで、以降はすべて対面とオンラインの併用形式での講座実施となった。開催日時は原則的には春・秋両学期を通じて毎週金曜の昼休みの60分間（12：30〜13：30）だったが、参加者のリクエストに希望に応じて延長されることもしばしばであった。参加者は平均して1回あたり3名程度で、主にドイツ語初級を履修し終えた2年生の学生だったが、ドイツ留学を控える3年生以上の学生、あるいはドイツ留学中の学生や聴講学生が参加することもあった。

今年度の講座内容は、数年来のコロナによる感染対策のため長らく対面でのコミュニケーションの欠如という状況を踏まえ、「教員と学生間および学生間の対面コミュニケーション」を目的とし、毎回の講座に特定のテーマを設定せず毎回の参加者との雑談の中から方向性を決定していくこととした。なお、参加者のリクエストによって使用した資料としては、Tagesschau、Nicos Weg、Spiegel TV（すべて無料動画としてインターネット上で提供されている番組）などが挙げられる。また、これを基にしてドイツ語の正確なリスニングの確認や基礎文法項目の復習、重要なフレーズや単語の確認、すでに大学授業内で既習の文法事項などを復習しながら、現代のドイツの時事的な問題について参加者間で意見交換を行った。

さらに秋学期からドイツ語のランゲージラウンジでは留学生のNoelle Müller氏（ノエル・ミュラー）

を担当に、『Deutsch am Dienstag』（火曜日のドイツ語）と題した新しいプログラムの実施を試みた。Müller氏はドイツのトリーア大学英文学科の3年生であり、2022年度の秋学期から本学で交換留学生として勉強をしている。『Deutsch am Dienstag』は毎週火曜日の昼休みに全10回開催し、完全対面形式の実施となった。参加者は1回あたり平均して2名程度で、主に1年生の学生であった。参加した学生は積極的にMüller氏とドイツ語で会話し、楽しく和やかな交流の場になったようである。

2.3　スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、Francisco GARZÓN先生を講師に、Tertuliaと名付けて、会話実践の時間を設定し、春学期オンライン、秋学期対面で行った。

自律的な学習をより効果的に行えるオンラインコース、セルバンテス文化センターが開設しているAVEglobalは、今年度も利用している。

オンラインコース：今まではそれぞれがDELE受験や将来の留学、さらには一定期間の現地での語学研修を経て、そこで得たスキルの維持等を考えての申し込みが目立っていたが、留学の実現の可能性が見えてこない現状では、応募者の減少が目立った。学習期間は長くなった一方で、定期的なチェックをしないと学生が自律的に学習できているかが把握できないこと、また時に学習を促したとしても、一方的な呼びかけであるためなかなか実情を掴めない点があり、さらに工夫が必要である。

会話スペース：春学期のオンラインは参加者ゼロのセッションが多かったが、秋学期は毎回何人かの、そして目的を持って参加した学生が見られたが、そのような学生が減少している。今後、時機にあったスペイン語圏のテーマを取り上げて、映像等を使ってスペインについての情報を共有することで、スペイン語圏への興味をかき立て、学習のモティベーションアップにつなげる工夫を続けたり、より学生が参加しやすい方法を考察したりして、さらに活発なスペースになるように努力を続けたい。

2.4　中国語部門：日高知恵実

2022年度ランゲージラウンジ（中国語部門）「中文会話倶楽部」は、4名の中国人留学生スタッフが中心となり、さらに教員である日高がサポート役に入る形で運営をおこなった。開催日は毎週月曜日のお昼休みとし、春学期は4月25日から7月18日まで全13回、秋学期は10月3日から1月16日まで全11回実施した。開催形態は、春学期はWeb会議ツール（Zoom）による完全オンラインであったが、秋学期は通常授業が原則対面となったため、参加を希望する学生の需要にこたえるべく、Zoomと対面（横浜校舎10号館1032教室）のハイブリッド形式とした。

毎回の活動では、中国の言語文化に関する様々なテーマを設定した。テーマは音楽、ドラマ・映画、飲食、ファッション、学校生活、交通事情など多岐にわたった。担当の留学生スタッフが自作のスライドやYoutubeの映像を使ってそれらを紹介し、日本人学生は発表を聞いて言語文化に対する理

解を深めたり、関連する中国語の単語やフレーズの発音練習をおこなった。4名の留学生スタッフはみな優秀かつ熱心で、しかも若い世代であることから、最新の中国文化事情についてたくさんの情報を提供してくれた。日本人学生の参加人数は年間を通じて2名から10名と決して多くはなかったが、それゆえに定期的に参加していた学生たちはランゲージラウンジの外でも繋がるほど、学部・学年、国籍を越えて交友を深められたようである。中級レベルの一部の学生に対しては、メインの活動とは別に、Zoomのブレイクアウトルーム機能を利用して、留学生スタッフと自由に会話を楽しめる場をセッティングした。

来年度は今年度の開催形態や内容などを見直して、より充実した活動を進めていきたい。またランゲージラウンジの周知にも力を注ぎ、より多くの学生に参加してもらえるよう尽力したい。

2.5　韓国語部門：李善姫

2022年度韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン」は、高槿旭先生により5月の3週目まではオンライン同時双方向型（Zoom）の形態で、5月の4週目からは対面とオンラインライブ併用のハイブリッド形式で実施された。

講座の実施状況は次のとおりである。

1）春学期：韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン」

毎週水曜日（12時35分～13時30分）実施され、参加人数は、春学期は3～24人であった。

2）秋学期：・韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン（初級）」
・韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン（中上級）」

秋学期には、初級と中上級の二つのクラスに分けて実施した。「韓国語ビタミン（初級）」は、毎週水曜日の12時35分～13時、「韓国語ビタミン（中上級）」は毎週水曜日の13時～13時30分に実施された。参加人数は、韓国語ビタミン（初級）」は3～7人、「韓国語ビタミン（中上級）」は2～3人であった。

●学習内容

学校生活、食事、買い物、映画、音楽など身近なテーマを中心に、より自然な韓国語表現を身につけるようにした。また日本と韓国の文化の違いについても話し合った。

テーマは、manabaで事前に知らせ、学生が前もって準備し、参加するようにした。

●学生の反応と成果

manabaで会話のテーマを事前に掲示することで、予習してくる学習者も多く、効率的に学習で

きたと思われる。学生の意見としては、「話しやすい環境で、プレッシャーを感じずに、韓国語で話すことができてよかった」、「韓国語が好きな仲間に出会えてうれしい」という意見があった。先生からは「ハイブリッドで実施することで、戸塚校舎に登校できない学生も参加することができて非常によかった」ということが伝えられた。

全体的にランゲージラウンジを実施することにより、韓国語で話す喜びや達成感を感じ、韓国語学習のモチベーションをあげることができたと思われる。

また、多くの学習者が参加できるように、ハイブリッド形式での実施を続けることが必要であると思われる。

2.6　フランス語部門：塩谷祐人

2022年度ランゲージラウンジ（フランス語部門）Pause Caféは、昨年度に引き続き、勝山絵深氏（本学非常勤講師）が担当した。対面での開催が可能になったものの、学生の参加のしやすさなどを考慮し、本年度も昨年度の開催方法を踏襲し、毎週月曜日にコンテンツをmanaba上で配信し、必要に応じてzoomを使用した交流会を開催した。

登録者数は67名と昨年度（約80名）に比べるとやや減ってはいるものの、一定以上の需要があることが窺える。なお、参加者はフランス文学科や国際学科の比率が高いが、さまざまな学科に所属する学生が参加しており、「学科を越えてフランス語を学ぶ学生たちが集まり、フランス語の疑問を解決したり、実践的なフランス語を習い覚えたりするだけでなく、フランスの情報が得られるカフェのような場所を設ける」という本ラウンジの目的に適うものとなった。

コンテンツの内容は、学生からの要望もあり、昨年度よりもフランス語の勉強方法や発音に関するものを強化したが、同時にフランスの日常生活にまつわる文化的な出来事（交通事情やクリスマスの様子など）も併せて紹介した。また、自主学習できるように、おすすめの勉強サイトや検定試験の情報、そして、小テストも作成し、力試しや授業の復習ができるようにした。この小テストは任意で取り組むものなので多くの学生が参加しているとは言い難いが、一方で毎回のように利用している学生もおり、本ラウンジを語学学習にも積極的に役立てようという学生の意欲が見られた。

今後も学生の要望に応えつつ、 文化と語学の両面からフランスに対する興味関心が高まるラウンジづくりを目指したい。なお、対面では特定の曜日の昼休みしか活用できなかった本ラウンジであるが、昨年度、本年度の活動を通じて、オンラインでの開催であれば通学時間や空き時間を利用して参加することが可能であり、キャンパスにとらわれることもなく参加できるという利点が浮き彫りとなった。しかし、ライブでの交流や対面で言葉を交わしながらフランスについて学生同士が話をできる場も必要であると思われる。そのため今後の課題としては、コンテンツと交流の場作りというラウンジの二つの特性が活かせる新たな運営方法も検討していきたい。

04

語学検定講座報告

04

語学検定講座報告

2022年度語学検定講座報告

中国語部門：洪潔清

2022年度の「中国語資格試験対策講座」は、白金キャンパスではHSK4級とHSK3級、横浜キャンパスでは中検4級講座をオンライン形式で実施された。以下は担当教員が提供した情報に基づいてまとめた実施報告である。

1. 実施方法について

三つの講座はいずれもmanabaとZoomを併用して実施された。manabaでは主に筆記問題を扱った。過去問を毎回一つの出題形式に絞って事前にmanabaの小テストにして公開し、受講者に問題を解かせる。Zoom授業では間違いの多かった問題について解説を行う。受講者に一週間弱の解答時間を与えて解かせた。十分な時間を与えることで、受講者には自分で単語を調べて考える習慣が身につき、かつ出題形式に習熟させる効果があった。

また、リスニング練習はZoom授業の中心となっている。スクリプトなしとスクリプトありの二つのパターンを用意し、両方やらせることで音声を聞く機会を増やすとともに、スクリプトなしでは聞き取れない語句を認識させる効果があった。実際に筆記問題の練習で覚えた単語はリスニングの問題にも役立てたと見られる。リスニング問題を解答した後、問題文を参加者に簡単に訳させることで理解の不十分なところを把握し、重点的に解説を行う。

2. 受講者について

単位が取得可能な講座ではないため、途中からついていけず、課題を怠ったりする学生もいるが、最初から最後まで大変真面目に勉強していた学生もいる。教員は受講者のレベルに合わせて個々に対応している。例えば、自信を失い、講座を辞退しようとする受講者には基本的なことから解説できると励ました。その結果、その受講者は最後まで参加し続け、終了時には「今はまだ力が足りないが、さらに学習を続けて、いずれは受験をしたい」と言ってくれた。

一方、与えた課題だけではなく、自ら多くの練習問題を取り入れ、中国語に大きな興味を示し、学習意欲が非常に高い受講者もいる。その学生は1回目と2回目の過去問試験には落ちていたが、３回目では高得点で合格した。最後まで受講した学生から「実用性の高い講座」、「効果がはっきり見えた」との声が寄せられた。

3. 今後の課題について

オンライン形式で実施することにより、通学やキャンパス選択の問題がなく、受講者に利便性を与えた一方、講座で使用するmanabaのコースは、学期が変わっても受講者が更新されるだけとなっている。継続して使用しているコンテンツや小テストが大量にたまってしまい、管理が難しくなる問題点があり、できれば学期ごとに新たなコースを開設してほしいとの要望があった。

ドイツ語部門：コンスタンティネスク　チェザル

2022年度のドイツ語検定試験対策講座は、春学期の木曜5限に3級対策講座（白金）、秋学期の水曜4限に4級対策講座（横浜）を、いずれも佐藤修司氏（本学非常勤講師）の担当で開催した（それぞれ全8回）。

3級対策講座はZoomを使用してのリアルタイム型の授業を実施したが、参加することのできない学生もいたため、教材資料をmanabaにアップロードし、適宜学生が自修した上で、質問等がある場合は同じくmanabaを通して受け付け、回答するオンデマンド式（教材提示型）の授業も併用した。4級対策講座は対面式授業を実施したが、こちらも授業に参加できない学生を考慮し、教材をmanabaに挙げた上で、3級同様の措置を講じた。加えて、両クラスとも学習の進捗度を確認するために、毎授業時に短い課題を提出させた（ただし、提出は任意とした）。

3級対策講座は、これまでの出題内容を踏まえた文法等の解説用教材を用意し、学生にはそれを参照した上で過去に出題された問題に解き方のヒントをつけてアップロードしたものを解かせ、授業中に答え合わせを行った。第1回～第5回授業時には文法問題を、第6回～第8回授業時には長文問題と聞き取り問題とを扱った。また、語彙力の向上を図って単語集を紹介したほか、授業時間内に扱うことのできなかった問題に関しては、解き方の説明と解答をつけたプリントを作成、配布した。ちなみに、登録した学生数は8名であるが、リアルタイム型の授業に参加した学生数は3名であった。また合格者は1名であった。

4級対策講座も、3級対策講座と同じように、文法等の解説用教材と過去問を用意し、授業時に答え合わせを行った（ただし、対面授業に参加できない学生には配布プリントにあらかじめ正解と説き方のコメントを付しておき、各自が自修できるように便宜を図った）。文法問題に関しては第1回～第6回授業を充て、第5回授業以降は、加えて長文問題と聞き取り問題も扱った。また、授業時間内に扱うことのできなかった問題に関しては、解き方と解答をつけたプリントを作成、配布した。ちなみに、登録者4名中、対面授業に参加した学生数は1名、教材提示型のそれのみに最後まで参加した学生数は2名であった。4級の合格者は2名であった。

スペイン語部門：大森洋子

スペイン語DELE準備講座は、今年度も、講師の先生との連絡をとりながら、Zoomとmanabaを使って行った。さらに、DELEと目的が同じながら、パソコン受験が可能で年間の受験チャンスが多いSIELEの準備にも適する講座として開講している。

1．募集に際して

横浜・白金キャンパスの学生を対象としていることを考慮し、引き続きオンライン講座で行い、1年以上の学習歴をもつ学習者に限って行った。

2. 講座内容について

昨年指摘した教材の配布等の問題点は、教材を準備するなどして問題の解決をはかってきた。

今回は、講師もZoomによるオンライン授業にも慣れたことで、スムーズに講座は進められたようである。

夏休みのコースでは、5日のコースであり、レベルが自分の目的や学習レベルにあっていない学生もいて、最後は2、3人の出席になった日もあったが、それでも目的をもった学生が熱心に授業に臨んでいたという報告を受けている。

秋学期についても、オンラインで講座を行ったため、普段は横浜開講のために白金で授業を受けている学生の受講が難しかったが、今回はその問題が解消した。さらに、水曜日でいろいろなイベントもある中で、11月のDELE試験まで、講座をうまく活用した学生も見受けられた。

3. 総括

受講者は少なかったが、学習者のスペイン語を学ぶモティベーションの一つとしてDELE試験受験、またSIELE受験などの可能性を学生に知らせていくことができ、自律学習の姿勢が身についていくだろうと期待している。それが、外国語教育、スペイン語教育の充実につながっていくと考えている。

本講座の実施にあたっては、LMSでのコース設定、アカウント作成など教養教育センタースタッフ、教務部スタッフ、情報センタースタッフにさまざまな協力をいただいた。改めて謝意を表したい。

韓国語部門：李善姫

2022年度韓国語の語学検定講座は、5月の3週目まではオンライン同時双方向型（Zoom）の形態で、5月の4週目からは対面とオンラインライブ併用のハイブリッド形式で実施された。

担当講師、実施期間、参加人数などは次のとおりである。

クラス	担当講師	実施曜日・時限	実施期間	参加人数
TOPIK I -1級	金南听	火曜日4時限	5月10日～ 6月28日 9月27日	1～7人
	柳慧政	火曜日4時限	10月 4日～11月29日	1～5人
TOPIK I -2級	秋賢淑	月曜日4時限	5月 9日～ 6月27日 9月26日～11月28日	3～8人 1～4人
TOPIK II	高槿旭	金曜日4時限	5月13日～ 7月 1日 9月30日～11月25日	2～11人 1～4人

●学習内容

TOPIK Ⅰ-1級クラス、TOPIK Ⅰ-2級クラス、TOPIK Ⅱクラス共に、過去問の「読解」「聞き取り」の問題を解きながら、質問に回答した。授業以外の時間の質問については、manabaを利用し、学生の質問に回答した。TOPIK Ⅱクラスはmanabaの個別指導を使用し、「作文」の添削指導を行った。またTOPIKの問題だけではなく、学生のニーズに合わせて、柔軟に対応した。

●学生の反応と成果

学生からは、「難しかったけど、新しい知識を得ることができてうれしかった」「TOPIKの受験を考えているので、大変勉強になった」という意見があり、講座担当の先生からは、「学生のレベルに差はあったものの、講座に続けて参加することにより、TOPIKの問題類型の理解をはじめ、学習上達が見られた」「この講座で、韓国語の総合的な能力を高め、初級から中上級へのレベルアップに繋がったと思う」などのご意見が伝えられた。また、「『ハングル』能力検定試験」の対策講座ではないが、TOPIK講座に参加し、勉強したことで、「『ハングル』能力検定試験」に受験した結果、合格した学生がいるという知らせもあり、大変有意義な結果が得られたと思われる。

全体的にハイブリッド形式で講座が実施されたことで、多くの学生が意欲的に参加できたと思われる。今後も多くの学習者が参加できるよう、ハイブリッド形式での実施が必要であると思われる。

フランス語部門：塩谷祐人

■仏検3級対策講座

本学非常勤講師の檜垣嗣子氏が担当する仏検3 級対策講座は、横浜キャンパス・白金キャンパスの両方の学生からの需要が見込まれるため、対面での開催が可能となった本年度も、あえてオンラインでの開講とした。

春学期は事前申し込みが9名、初回受講者は6名でのスタートとなり、最終的には5名が参加を続けた。秋学期は事前申し込みが9名あり、初回は全員が参加。最終的には4名が参加を続けた。回が進むにつれて参加人数が減少するのはある程度仕方がないこととはいえ、その原因のひとつは、学生自体が3級のレベルが事前に把握できていないことにある。その差を初回授業でどのようにフォローし、学生の要望に応えていけるかも考えたい。

講座の内容は昨年度を踏襲し、事前にmanabaを通じて過去問題を配布し解いてもらい、Zoomでその解説を行うという形式を取った。試験対策講座としては、実践的な力を伸ばすための有効な手段であると思われ、実際、両学期とも、検定試験に合格したとの報告が複数なされている。なお、受講者は各自の判断で3級に限らず4級から2級に挑戦し、それぞれが成果を残している。また、検定試験は受けずに、授業の補習として参加している学生もいるように見受けられるが、それもまたこの講座のひとつの役割であろう。

仏検3級は「基礎の総まとめ」と位置づけられるため、一定のニーズがある。そのため、学生の参加のしやすさを考慮し、今後もmanabaとZoomを併用したやり方を継続することも考えている。一方で、春学期と秋学期を同一曜時限で設定すると履修状況によって両学期とも参加ができないという声も学生から寄せられている。今年度春学期は火曜５限、秋学期は水曜５限と、試みに曜日を変えてみたが、今後も曜時限を別に設定するなどの対策を検討していきたい。

■仏検4級・5級対策講座

昨年度に新たに開講した仏検4級対策講座であるが、2022年度も引き続き開講し、本学非常勤講師の加藤美季子氏が担当した。開講２年目となる本年度は、開講方法やレベルの設定を、より学生のニーズに適うように調整をしながらの運営となった。具体的には、春学期は4級対策講座としてオンライン開講とし、秋学期は対象を広げて4級と5級の対策講座とし、対面で行った。

春学期は事前申し込みが5名、2回目からは1名の参加となったが、最後まで当学生は受講を続けた。少人数でもニーズがあれば開催する意義はあるであろうが、学生が2回目以降も参加するモチベーションが保てなかったひとつの理由に、オンライン受講の手軽さがあると推察される。また4級は主に横浜キャンパスの学生を対象としているが、他の授業が対面となったため、オンラインでの参加がしにくくなったということも原因として考えられる。

春学期の状況を踏まえて、秋学期は4級・5級対策として対面で行った。事前申し込みが４名で、最終回だけは1名となったものの、ほとんどの回に3名が出席していた。なお、5級の受験を考えている学生の参加率が高く、予想以上に5級対策のニーズがあることがわかった。ただし春学期と秋学期の要望が同じであるとは限らないため、来年度は両学期ともに4級・5級対策講座とし、対面で開講した上で、学生のニーズをより正確に把握しつつ、開講方法や対象レベルを調整していきたい。

講座では、事前に配布した過去問題の解説や説明を行った。これは対策講座としては実践的で、学習効果も高い方法であると思われる。今後もこのやり方を基本としながら、学生の学習意欲を高めつつ、さらに上の級に挑戦できるよう促していきたい。

日本語部門：徳間晴美

開講2年目となる日本語関連講座について、以下のとおり報告する。

■JLPT（日本語能力試験）N1講座

2022年度はN1レベルの講座を開講し、それぞれ7月と12月の試験日前に実施した（全8回）。講座は2021年度同様、manaba（LMS）を利用して受講生への連絡や資料配布を行い、授業はZoomでの同時双方向型で進められた。受講生は5名以下の少数ではあるが、JLPTのN1を受験予

定であるという目的を持った留学生であり、熱心に取り組んでいた。

講座の内容については、初回授業で各受講生が希望する分野を聞きとり、学習内容を柔軟に調整しながら行われた。講座担当者からは、受講生にとって、N1文法のブラッシュアップになったとともに、自信をつけることができた講座であったとの報告がなされた。

■日本語教育入門講座

受講生は留学生数名を含む、学部生10名から15名であった。講座は、上記講座同様のmanaba（LMS）およびZoomで実施した。開講時は、異文化交流に興味があるといった、ややぼんやりとした理由で参加した学生たちも、「やさしい日本語」とは何かについて考えたりする中で、徐々に日本語の特徴や教え方のコツを捉えていった。自分たちで考え、話し合って解決するというスタイルにも慣れていき、意見が交わせるようになっていった。本講座の受講を通し、「ボランティア教室で子どもたちに日本語を教えてみたい」といった具体的な目標が見えてきた受講生や、自分で図書館に行って日本語の教科書を借りてみたり、日本語教育能力検定試験の勉強を始める学生もいたりと、日本語教育の世界に一歩近づくきっかけになったようである。

05

研究プロジェクト

05

プロジェクト報告

中東・北アフリカ諸国の高等教育に関する研究動向の調査

プロジェクトメンバー：池田昭光

本研究プロジェクトは、高等教育が拡大するとともに、新自由主義的風潮のもとで高等教育が変化を余儀なくされている世界的な動向が中東・北アフリカ地域に及ぼす影響を検討するものである。この地域における教育関連のテーマは、特にイスラーム教育（宗教教育）を中心に注目を集めてきた。それに対して本研究プロジェクトは、直接的には宗教にかかわらない領域を対象とし、むしろグローバル化や新自由主義など、地球規模で現代に展開する教育現象に着目する点で、新しい研究領域の開拓を目指す。

2022年度は、まずは関連する先行研究を中東地域研究、高等教育の文化人類学的研究、教育社会学、高等教育論などに求め、文献調査をおこなった。その結果、（1）中東・北アフリカ地域では、ペルシア湾岸諸国における事例研究の蓄積がなされつつあること、（2）グローバルな潮流としての高等教育改革の影響が、ペルシア湾岸諸国で先鋭に現れていること、（3）筆者の専攻する文化人類学においても、高等教育や大学改革について注目がなされつつあり、人・モノ・カネの流れをめぐるグローバルな動きがローカルなレベルでどのように地域や人間をかたちづくるかの観点で興味をもたれていること、などがわかってきた。

そのため、本プロジェクトにおいてもこうした動向をふまえ、まずはカタールやアラブ首長国連邦（特にドバイやアブダビ）を中心に、ペルシア湾岸諸国をテーマにした文化人類学的ないしはフィールドワークにもとづく研究の事例紹介とその意義を整理し、調査報告として発表した。グローバルに展開する高等教育が、一種の権力として高等教育に関係する人びとをつくりだし、あるいはつくりかえる側面が伝われば幸いである。

（2022年度刊行物）

池田昭光「中東・北アフリカにおける高等教育の文化人類学的研究――予備的考察としての研究例紹介」『カルチュール』17巻1号、2023（予定）

プロジェクト報告

学部留学生に対する就職活動支援に関わる教育方法論の構築

プロジェクトメンバー：山内薫

1. 本プロジェクトの概要

本研究は、学部留学生に対する就職活動支援に関わる教育方法論の構築を目的とする。

報告者は、2021年度より留学生の就職活動に関わる科目である「日本語研究2／日本語4」（明治学院共通科目）を担当している。当該科目は、日本人学部生に共通する就職や就職活動に関する知識に加え、留学生が日本あるいは母国の日本企業に就職するために必要となる情報や日本語表現能力を得ることを目的とする。留学生の就職活動においては、日本人学部生に比べ、特有の利点と困難点がみられる。例えば、南雲・寺石（2019）では、日本の産業界に留学生を専門型人材として雇用したいという需要がある一方で、留学生が日本での就職を希望する際の壁として、就職に関する理解不足が指摘されている。具体的には、日本独特の採用方法に関する理解不足により、就職活動の開始時期が遅くなり、そのことが留学生の就職率の低さにつながるという負の連鎖が指摘されている。そこで、本研究では、学部留学生の就職活動における困難点を把握するため、以下の1）～3）の調査を進めている。

2. 現在までの進捗

1）文献調査

①学部生対象の就職活動に関わる教科書及び書籍

②関連分野の書籍：（キャリア教育、生涯学習・生涯教育、異文化間能力育成のための複言語・複文化教育、自らのルーツを理解するための継承語教育）

2）実践研究：「日本語研究2／日本語4」科目の受講生に対する聞き取り調査、及び受講生の授業における成果物の収集

①明治学院大学教養教育センター研究倫理委員会倫理審査

申請（2022年2月25日）、承認（2022年3月23日、承認番号：2）

②調査対象者

2021年度「日本語研究2／日本語4」（明治学院共通科目）受講生の内、下記除外基準に該当する者以外の受講生全員（10名）を研究協力の募集対象とし、その中から応募があった以下の7名を選定の対象とした。

「日本語研究2A」及び「日本語研究2B」履修済み：2名
「日本語4A」及び「日本語4B」履修済み　　：3名
「日本語研究2B」のみ履修済み　　：2名

③調査方法

上記調査対象者に対し、「研究対象者への説明文書」で説明をし、「研究対象者からの同意文」にて同意を得た上で、〔インタビュー事前アンケート調査（30分程度）→インタビュー調査1回（Zoom ／1時間程度）→フォローアップインタビュー調査（メール／30分程度）〕という

手順で、順次、回答の収集を開始した。現在、7名全員の回答の収集を終了した段階である。

3）本学キャリアセンターに対する聞き取り

本学における就職活動支援における状況及び方法の聞き取り（例：独立行政法人日本学生支援機構（2022）「外国人留学生のための就活ガイド2023」のデータ版紹介、本学システムの「キャリクル」、外国人留学生のための就職ガイダンス）

3．今後の予定

今後は、上述した調査結果をとおし、学部留学生の就職活動における困難点を把握するため、障壁となる要因について分析及び考察を進める。さらに、分析・考察の結果、明らかになった学部留学生の困難点や障壁を相対化しつつ、就職活動というライフイベントを自らのキャリアに位置づけられるような教育方法論の構築を図る。

2023年度は、本研究の成果を発表及び論文としてまとめる予定である。本研究を通し、学部留学生に対する就職活動支援に関わる教育方法論が構築されることは、新たな教育方法論の構築という学問的意義を持つのみならず、文部科学省が推進する「就職支援に係るプラットフォームの構築等、留学生の受入れ環境支援」の一端を担う可能性があることから社会的意義も持つと考えられる。

【参考文献】

独立行政法人日本学生支援機構（2022）「外国人留学生のための就活ガイド」
〈https://www.jasso.go.jp/ryugaku/after_study_j/job/guide.html〉（2022/12/19参照）
南雲智・寺石雅英編（2019）『留学生の日本就職ガイド2021』論創社
文部科学省（2021）「外国人留学生の就職関係」
〈https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1370919.htm〉（2022/12/19参照）

06

研究業績

06

李 善姫

【論文】

「従属節の動詞が韓国語の移動動詞の場合の従属節と主節の意味的な関係―従属節の動詞が어서で現れる文を中心に―」
明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュール』第17巻（2023年3月掲載予定）

池田 昭光

【論文】

「中東・北アフリカにおける高等教育の文化人類学的研究――予備的考察としての研究例紹介」明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュール』第17巻（2023年3月掲載予定）

「不信から生まれる信頼？――モロッコ・ベルベル人の「寛容」を中心に」『イスラーム信頼学へのいざない』黒木英充・後藤絵美（編）、東京大学出版会（2023年3月刊行予定）

塩谷 祐人

【著書】

『表現パターンを身につけるフランス語作文』（白水社、2022年9月）

徐 正敏

【著書】

『日本という隣人』（韓国語）、ドンヨン出版社、2022年、全体256頁

【監訳】

『儒学から見出した韓国キリスト教の成長』、かんよう出版、2022年、全体292頁

【共著】

『霊性と社会聖化』(韓国語)、天地文化出版社、2022年、398-429頁（全体970頁）

『メタバース時代の神学と牧会-延世神学文庫011』(韓国語)、ドンヨン出版社、2022年、50-57頁（全体214頁）

『風流神学百年-柳東植教授上寿記念文集』(韓国語)、ドンヨン出版社、2022年、325-339頁（全体373頁）

【編著】

『TK生池明観アジアからの通信―池明観先生第一周期追慕文集』（韓国語）、ドンヨン出版社、2023年、全体239頁

徳間 晴美

【研究報告】

「場面（人間関係と場）の動態性と主体的なとらえ方」『待遇コミュニケーション』第19巻、68-72　待遇コミュニケーション学会　2022年4月

「待遇コミュニケーションの理論的枠組み（2021年度版）」『待遇コミュニケーション』第19巻、89-128　待遇コミュニケーション学会　2022年4月
共同執筆者：アドゥアヨム・アヘゴ希佳子、李ジウォン、任ジェヒ、蒲谷宏

【学会発表】

運営委員会企画「待遇コミュニケーションにおける「丁寧さ」を考える」 待遇コミュニケーション学会2022年秋季大会（15周年記念大会　オンライン開催）（2022年10月22日）
共同発表者：アドゥアヨム・アヘゴ希佳子、李ジウォン、任ジェヒ、蒲谷宏

「アルバイト経験を通して得ている待遇コミュニケーションに関する学び―小学校でアルバイトをする留学生Tの事例分析―」第47回社会言語科学会研究大会　東京国際大学第二キャンパス（2023年3月18日発表予定）

野副 朋子

【論文】

野副　朋子、「ゲノム編集トマトを用いた実験実習」、明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュール』第17巻（2023年3月掲載予定）

【調査・研究報告】

タルホコムギの多様性導入による乾燥地の塩類集積土壌で生育可能なパンコムギの創生、Generation of bread wheat which are tolerate to the alkaline salt affected soil in drought climate area、鳥取大学乾燥地研究センター令和4年共同研究発表会（2022，鳥取）

福山 勝也

【学会発表】

The Effect of Coexistence Metal Ion for the Color in the Borax Bead Test.
Virtual Intercontinental Assembly on Calorimetry and Thermal Analysis（VIACTA2022）(Tokyo, Japan-Online). October 25, 2022.

山内 薫

【学会発表】

「「ことば」の学びに寄り添う日本語教育―「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざして―」教養教育センター付属研究所2021年度第2回研究報告会（対面、オンライン開催）（2022年3月23日）

「「使うあてのない日本語学習」は学習者に何をもたらすのか」日本語教育学会大会2022年度春季大会（オンライン開催）（2022年5月21日）

「「ことば」の学びに寄り添う日本語教育―「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざして―」言語文化教育学会第86回例会（オンライン開催）（2022年6月12日）

【その他】

「「生活から人生への視野の拡がり」を目的とする言語教育実践」『生涯学習研究e辞典』
http://ejiten.javea.or.jp/content50522024.html（登録年月日：2022年10月16日）

「「移動とことば」と「移動する子ども」学（鼎談：山内薫、半嶺まどか、川上郁雄）」第41回早稲田こども日本語研究会―「移動する子ども」学を考えるシリーズ⑪（オンライン開催）（2022年10月9日）

Dax Thomas

【著書】

Kusaka, JA., Elam, Jesse. and Thomas, Dax. (2022). *Global Perspectives in the English-speaking World: Past and Present.* Tokyo: Shohakusha.

【学会発表】

Audio-assisted extensive reading: student perceptions of its effects on reading performance and motivation. The 14th Asian Conference on Education (Tokyo, Japan). November 29, 2022.

ELAM Jesse

【著書】

Kusaka, JA, Elam, Jesse, and Thomas, Dax. (2022). *Global Perspectives in the English-speaking World: Past and Present.* Tokyo: Shohakusha.

◆上記のほか、所員の業績を、下記URLにて報告しております。
https://gyoseki.meijigakuin.ac.jp/mguhp/KgApp?courc=270000

2023年3月31日　発行

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報
SYNTHESIS 2022

編集代表　福山　勝也
発 行 者　福山　勝也
挿　　画　土方　淳代
発　　行　明治学院大学 教養教育センター付属研究所
〒244-8539　横浜市戸塚区上倉田町1518
電話 045-863-2067
制　　作　相和印刷株式会社

Printed in Japan

SYNTHESIS 2022
シンセシス

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報 2022